

漢詩和訓 七七調のすすめ

横よこ 山やま 悠ゆう 太た
(作家)

【和訓】漢字・漢語にその字義に相当する和語を当てて読むこと

(明鏡国語辞典)

樂遊原

ラクユウゲン

向むか 晚ばん 意い 不ふ 適た
くれゆくにつれ たまらなくなり

驅く 車くるま 登のぼ 古ふる 原はら
くるまはしらせ このおかのぼる

夕ゆふ 陽ひ 無な 限げん 好こう
ゆうひのながめ なんともいえず

只ただ 是こゝ 近ちか 黄わう 昏こん
ただひたすらに たそがれてゆく

晚ふれに向むかんとして 意い適たわず
ふれなんな いかな

車くるまを駆かりて 古こ原げんに登のぼる
くるまか こげんのぼる

夕ゆふ陽ひ 無む限げんに好よし
ゆふひ むげんによし

只ただ是こゝれ 黄わう昏こんに近ちかし
ただこゝれ ほうこんにちかし

早発白帝城

ハクテイジヨウをたつ

朝あした辞じ白はく帝てい 彩さい雲うん 間かん
あしたじ ばくていぎょうん さいうん かん

朝あしたの辞じは 彩さい雲うん 間かん
あしたのじは くもまにつけて

千里せんり江かう陵りやう 一いつ 日にち 還かへ
せんりかうりやう ひとつにち へん

両りやう岸あん猿えん声せい 啼な 不ふ 尽じん
りやうあん えんせい な ぶ じん

朝あしたに辞じす 白はく帝てい彩さい雲うんの間かん
あしたじす ばくていさいうんのかん

千里せんりの江かう陵りやう 一いつ日にちにして還かへる
せんりのかうりやう ひとつにちにしてかへる

両りやう岸あんの猿えん声せい 啼ないて尽じんきざるに
りやうあんのえんせい ないてじんきざるに

輕けい舟しゅう已すでに過すぐ 万ばん重じゆうの山さん
けいしゅうすでにわづまのさん

日本人は漢詩を読むとき、それを書き下して読んできました。近代以降は、それを独自に和訳する文学者も現れました。例えば井伏鱒二、佐藤春夫、土岐善麿などがそうです。彼らはそれぞれに、個性的な訳詩をつくりました。今回私は、今までとは少し趣向の異なる漢詩の訳し方を「和訓」と称して、皆さんにお勧めしてみたいと思います。冒頭に載せたのは、李商隱の「樂遊原」(上段)と李白の「早発白帝城」(下段)の和訓です。併記の書き下し訳と比較してみてください。アプローチが異なれば、これだけかたちも異なるのです。

私が試みた漢詩の和訓とは、次のような方法をとります。まず、五言詩であれば二と三の間、七言詩であれば四と三の間で意味が切れるので、それらを二字と三字、或いは四字と三字の一まとまりの漢語とみなし、それぞれに七音の和語(わかりやすい日本語)をルビのように当てます。それから、詩の意味が通るように全体を整えます。これだけです。

七七調をお勧めするわけは、詩のリズムを保ちながらも融通の

利く形式だと思っからです。五七調や七五調の方がより日本の詩らしいリズムなのかもしれませんが、五音では自由度が少なく、ハードルが高いです。和訳をひらがな表記にしたのは、原詩の漢字との対比を強調したいがためです。隣り合わせに表記することで、訳を読みながら横目で原詩も同時に確認でき、さらにはその訳の意味をも補ってくれます。例えば李白の絶句の第二句「千里江陵」を「はるばるとおく」と和訓しながら、その遠くにある場所が「江陵」であることも無理なく読み取れます。このようにして、原詩と和訓を切り離さず融合させながら詩を味わうこともできます。

もちろんこの和訓にも欠点があります。翻訳には（とりわけ詩の翻訳には）何かしらの歪みが生じてしまうものです。ただ、漢詩を訳し、また味わう一つの新しい方法として、ご提案した限りです。漢詩を自ら訳すことは、その詩への理解、及び愛着を一層深めてくれます。字数を整え、ぴったりの言葉を求めて推敲したり、対句や韻に頭を悩ませたり……。これはまさに、漢詩の作者たちもやっていたことです。もし時間に余裕があれば、授業で生徒の皆さんに漢詩の和訓に挑戦させてみてはいかがでしょうか。思いがけない名訳（或いは迷訳？）が飛び出てくるかもしれません。もしくは、私のように新しい訳のスタイルを考えてみるのも楽しいものです。

最後に二首の律詩の拙訳をご披露いたします。どちらもおなじみの唐詩です。

春望
はるのながめ

杜甫

国破山河在
城春草木深
感時花溅泪
恨别鸟惊心
烽火连三月
家书抵万金
白头搔更短
浑欲不胜簪

香炉峰下新卜山居
コウロホウのふもとにうつり
草堂初成偶題東壁
くさぶきのいえをたてる

白居易

日高睡足犹慵起
小阁重衾不怕寒
遣爱寺钟欹枕听
香炉峰雪拨帘看
匡廬便是逃名地
司馬仍為送老官
心泰身寧是歸处
故郷何独在长安

横山悠太（よこやま ゆうた）

一九八一年、岡山県生まれ。『吾輩ハ猫ニナル』で、第五六回群像新
人文学賞受賞、第一五一回芥川龍之介賞候補。